

大阪府埋蔵文化財調査報告2012-4

林
遺
跡
・
国
府
遺
跡

林遺跡・国府遺跡

— 交通安全事業に伴う発掘調査 —

大阪府埋蔵文化財調査報告二〇一二四

大阪府教育委員会

大阪府教育委員会

林遺跡・国府遺跡

— 交通安全事業に伴う発掘調査 —

大阪府教育委員会

序 文

一般国道旧 170 号と主要地方道堺大和高田線が交わる藤井寺市土師の里交差点付近の交通安全事業に伴い発掘調査を実施しました。

土師の里交差点の東南側には近畿日本鉄道南大阪線の土師ノ里駅が所在します。一帯は東西南北の四方向に走る自動車と駅からの乗降者が行き交う交通量の多い場所です。自動車と人の通行を確保しながらの事業は長い期間を必要とします。事業に伴う発掘調査も、工事の進捗と歩を合わせて小規模な調査を断続的に長期間にわたり実施しました。

平成 13 年度、18 年度、19 年度、21 年度にはこの事業による主要部分の調査を実施し、その成果は報告書として刊行しています。本書は、平成 23 年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

旧石器時代以来、連続と継続した林遺跡・国府遺跡には、陵墓に指定されている巨大古墳を中心に構成される古市古墳群が重なり、多様な遺構・遺物が検出されています。今回の調査は林遺跡のなかに存在する高塚山古墳の西側付近の調査を主に実施し、古墳時代の遺構面を確認することができました。

現在、本府は堺市・羽曳野市・藤井寺市とともに、百舌鳥古墳群と古市古墳群の世界遺産への登録を目指しており、本書に掲載した調査結果も、古市古墳群を考える上で貴重な資料になるものです。

最後になりましたが、発掘調査に実施についてご協力をいただきました地元の皆様ならびに関係機関に深く感謝いたします。今後とも、文化財保護行政に一層のご協力とご理解をたまわりますようお願い申し上げます。

平成 25 年 3 月

大阪府教育委員会 事務局
文化財保護課長 荒井 大作

例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて実施した交通安全事業に伴う林遺跡（藤井寺市沢田3丁目所在）、国府遺跡（国府1丁目所在）の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、文化財保護課調査第二グループ主査 小林義孝が担当し、平成23年12月12日から平成24年3月19日に実施した。遺物整理は、調査管理グループ主査 三宅正浩、同副主査 藤田道子と調査第二グループ専門員 西口陽一と小林が担当した。
3. 本調査の調査番号は、11055（林遺跡）・11056（国府遺跡）である。
4. 本書に掲載した遺物の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 調査で製作した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
6. 本書の執筆・編集は、小林が担当した。
7. 発掘調査、遺物整理及び本書の作成に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
8. 本書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、294円である。

目 次

序 文

例 言

第1章 調査に至る経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	2
第2章 位置と環境	4
第3章 調査の成果	6
第1節 23-1区の成果	6
第2節 23-2区の成果	10
第3節 23-3区の成果	10
第4章 まとめ	12

挿図目次

- 第1図 調査地の位置
第2図 調査区の配置
第3図 古市古墳群における土師の里交差点の位置
第4図 23-1区平面図
第5図 23-1区断面図
第6図 18-1区墓01の遺構と遺物
第7図 23-1区出土遺物(埴輪片)実測図
第8図 落ち込み出土遺物(須恵器)実測図

図版目次

- 図版1 23-1区
上：調査区西部北側全景(西から) 下：調査区西部北側土層断面(南東から)
- 図版2 23-1区
上：調査区東部南側全景(西から) 下：調査区東部南側土層断面(南西から)
- 図版3 23-1区
上：調査区中央部南側全景(東から) 下：調査区西端部全景(南から)
- 図版4 23-2・3区
上左：23-2区東部全景(東から) 上右：23-2区西部全景(東から)
下左：23-2区土層断面 下右上：23-3-1区全景(北から)
下右下：23-3-2区全景(北から)
- 図版5 遺物(23-1区)
上：円筒埴輪(古墳時代前期) 下：形象埴輪(古墳時代中期)
- 図版6 遺物(23-1区)
上：円筒埴輪(古墳時代中期) 下左：須恵器広口壺
下右：須恵器小型直口壺

第1章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過

主要地方道堺大和高田線および一般国道旧170号が交わる藤井寺市に所在する土師の里交差点の改良工事に伴って林遺跡（藤井寺市沢田3丁目）、国府遺跡（国府1丁目）の発掘調査等を実施した。

土師の里交差点とその付近には林遺跡、国府遺跡、土師の里遺跡が所在し、これらの遺跡と重複して市野山古墳（允恭陵）、仲津山古墳（仲津媛陵）をはじめとする古市古墳群を構成する古墳が分布する。著しく埋蔵文化財が密集している地域である。当該事業に伴う調査の範囲においても高塚山古墳（林遺跡）、唐櫃山古墳（国府遺跡）、鍋塚古墳（土師の里遺跡）などが所在している。

既往の調査 当該事業に伴う発掘調査の主要部分は平成13・18・19・21年度に実施し、その成果は3冊の報告書として刊行している。

平成13年度 主要地方道堺大和高田線において土師の里交差点の東方、道路の北側部分にお



第1図 調査地の位置 (S = 1/5万)
[50万分の1地形図「大阪東南部」(国土地理院1984)より]

いて調査区を設置。唐櫃山古墳の墳丘と西側周濠の一部を検出した（註1）。

平成18年度 主要地方道堺大和高田線において土師の里交差点の西側、道路の北側部分で5地点（トレンチ18-1～5、林遺跡・高塚山古墳）、交差点北側の一般国道旧170号の東側で1地点（トレンチ18-6、国府遺跡）の調査を実施した。高塚山古墳の墳丘の一部と、古墳の西側で埴輪片を敷き詰めた埋葬施設を検出し、6世紀末から7世紀初頭に比定される（註2）。

平成19年度 前年度実施したトレンチ18-4・18-5間に19-1区、近鉄土師ノ里駅の北側、主要地方道堺大和高田線との間に19-2区を設置した。唐櫃山古墳の後円部の西側墳丘と周濠の一部を検出。鍋塚古墳の北側から東側に5地点（トレンチ19-3-1～5）のトレンチを設置し、鍋塚古墳の範囲について確認した（註3）。

平成21年度 19-2区調査区の東側に調査区を設定。唐櫃山古墳の後円部墳丘と東側周濠の一部を検出した（註4）。

当該年度の調査 本書で報告する平成23年度の調査は、主に交通安全施設である歩道の新設に伴うものである。主要地方道堺大和高田線と一般国道旧170号の両道路は土師の里交差点を最高所として厚い盛土が施されており、当該工事による掘削が盛土中に収まる部分も多い。調査は工事によって遺構面や遺物包含層が削平される範囲において実施した。併せて歩道と車道間に設置される雨水管と集水弁の部分において掘削深度が遺構面等に至るかどうかを確認した。

調査は、主要地方道堺大和高田線の北側、18-2区をはさんで18-1区と18-3区の間に設置した調査区（23-1区）では面的に発掘調査を実施した。さらに主要地方道堺大和高田線の南側に設置した23-2区、一般国道旧170号の東側に設置した23-3-1～23-3-4の4カ所の調査区では工事による掘削深度まで掘削し遺物包含層や地下遺構の状況の把握に努めた。

註 1)『唐櫃山古墳』（大阪府埋蔵文化財調査報告2000-9）

2)『林遺跡・国府遺跡・土師の里遺跡—一般国道（旧）170号及び主要地方道堺大和高田線交差点改良工事に伴う発掘調査—』（大阪府埋蔵文化財調査報告2008-4）

3) 註2と同じ

4)『唐櫃山古墳』（大阪府埋蔵文化財調査報告2010-2）

第2節 調査の方法

工事が遺構面や遺物包含層におよぶ範囲について調査を実施した。また、遺構面、遺物包含層の遺存深度を確認し、発掘調査実施の有無を判断するための調査も実施した。

23-1区は、歩行者の通行が多い場所であり、その通行路を確保しながら四分割して調査を実施した。23-2区は、用地の確保されており重機等において幅約1mのトレンチを設置し、遺構面、遺物包含層の深度を確認した。23-3-1～4区も遺構面、遺物包含層の深度を確認するためにそれぞれ1m四方のトレンチを設置した。

第2章 位置と環境

主要地方道堺大和高田線と一般国道旧170号が交わる土師の里交差点付近は、国府遺跡、林遺跡、土師の里遺跡が境を接して所在し、さらに陵墓に比定される巨大古墳を中心とする古市古墳群の北半分が存在する。土師の里遺跡は近鉄南大阪線の南側部分、林遺跡と国府遺跡は北側部分に当る。さらに一般国道旧170号によって林遺跡（西側）と国府遺跡（東側）に分割される。

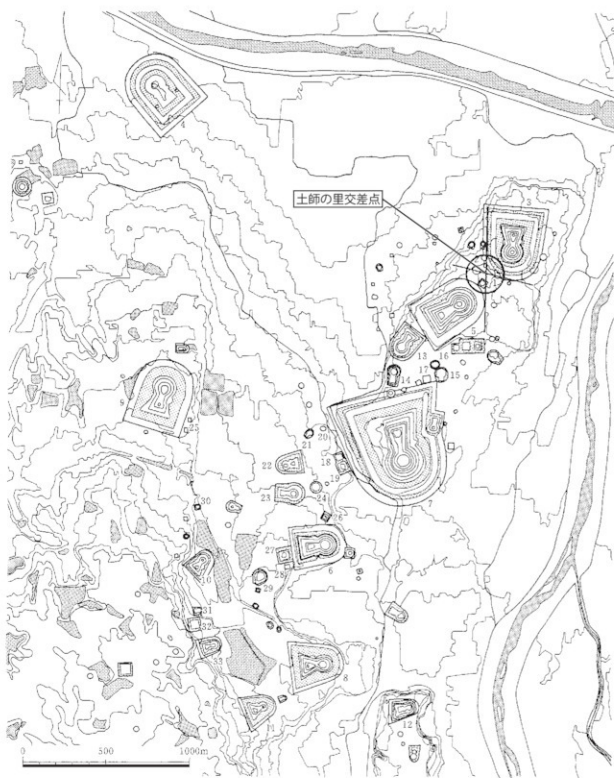
これらの遺跡群や古墳群が立地する国府台地の段丘上には旧石器時代から連続と遺跡が形成されている。台地の北端部分に立地する国府遺跡は、国府型ナイフ形石器で旧石器時代の標識遺跡となり、さらに多量の縄文時代人の人骨が埋葬された状態で発見されたことで著名である。さらに「国府」という地名が示すように河内国府の所在地と推定され、官衙的性格が想定される奈良時代の遺構群などが検出されている。縄文時代の人骨出土地と衣縫廃寺などが所在する範囲を中心に国指定史跡となっている。さらに国府台地を北に降りた場所に立地する船橋遺跡でも、縄文時代晩期の船橋式土器、弥生時代や古墳時代初頭の土器群、さらに無文銀銭など奈良時代の遺物が、大量に出土している。

林遺跡も縄文時代の集落跡をはじめ、古墳時代、古代・中世の遺構と遺物が多く検出されている。土師の里遺跡には、仲津山古墳や中小の古墳が所在し、その間を縫うように古代の集落や墓域が存在している。またいずれの遺跡においても古代寺院が所在しており（林遺跡―祥志廃寺、国府遺跡―衣縫廃寺、土師の里遺跡―土師寺跡）、その造営を担った古代氏族がこの地域に密集して存在していたことを推測させる。また、現在もこの地が交通の要所であると同様に古代の難波と大和の飛鳥を結ぶ古代の幹線道路である長尾街道（大津道）が付近を走っている。

国府台地上にはこれら3遺跡と重複して、誉田御廟山古墳（応神陵）、仲津山古墳（仲津媛陵）、市野山古墳（允恭陵）の巨大古墳が並び、これらの古墳の間に全長（直径）数10m級の古墳が所在している。さらに発掘調査によって発見された小形古墳も多くみられる。

土師の里交差点は、仲津山古墳と市野山古墳の間に位置し、唐櫃山古墳、長持山古墳、高塚山古墳、鍋塚古墳など中小の古墳が一帯に分布している。この中で発掘調査によってその内容が明らかなのは、唐櫃山古墳と長持山古墳である。当該事業による一連の工事に伴って調査の対象となった唐櫃山古墳は、主要地方道堺大和高田線の新設時に主体部の調査が実施されている。全長約53mの帆立貝式の前方後円墳であり、市野山古墳の後円部南側外堤に接するように位置する。また西側外堤に隣接して所在した長持山古墳は、土取りで消滅したが、直径約40m、高さ約7mの円墳であった。両古墳ともに、鎮留甲冑や金銅装馬具を副葬し、竪穴式石槨に阿蘇凝灰岩を削り抜いた家形石棺を有しており、ほぼ同時期の築造であると考えられる。ともに市野山古墳の陪塚の可能性が高い。

このように稠密に遺跡や古墳が分布している環境の中に当該の調査区は存在する。



第3図 古市古墳群における土師の里交差点の位置

1. 唐櫃山古墳 2. 長持山古墳 3. 市野山古墳 (允恭陵) 4. 津堂城山古墳 5. 仲津山古墳 (仲津媛陵)
6. 墓山古墳 7. 登田御廟山古墳 (応神陵) 8. 軽里大塚古墳 (登田白鳥陵) 9. 岡ニサンザイ古墳 (仲哀陵)
10. ボケ山古墳 (仁賢陵) 11. 白髪山古墳 (清寧陵) 12. 高屋城山古墳 (安閑陵) 13. 古室山古墳 14. 大島塚古墳
15. 盾塚古墳 16. 鞍塚古墳 17. 珠金塚古墳 18. アリ山古墳 19. 東山古墳 20. 藤の森古墳
21. 蕃上山古墳 22. はさみ山古墳 23. 野中宮山古墳 24. 越中塚古墳 25. 岡古墳 26. 野中古墳
27. 浄元寺山古墳 28. 西鶴山古墳 29. 青山1号墳 30. 五手治古墳 31. 水塚古墳 32. 久米塚古墳 33. 峯ヶ塚古墳

第3章 調査の成果

第1節 23-1区の調査(図版1・2・4)

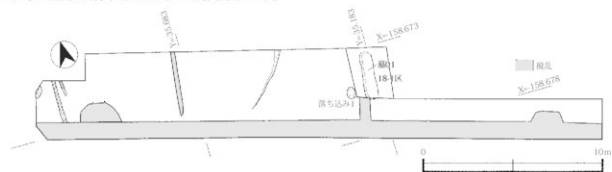
23-1区は、全長(東西)約32m、幅は、既設の道路部分に当る約2.5mを基本とし、調査区西部(18-2区より西)ではさらに北側へ2.5mが加わり、約5mの幅をもつ。調査区全体を四分割し、さらにそのうちの三つの区画については区画の中で排土を反転しながら調査を実施した。

(1) 基本層序

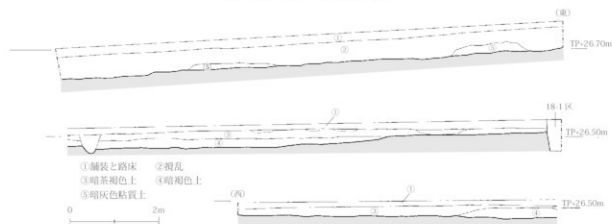
既設道路部分にあたる調査区の南側では、地山(黄褐色砂質土)の上層は基本的に盛土または攪乱された現代の土層であった。地山の上面はすでに削平されている部分が多く、遺構は検出されなかった。

調査区西部の北側に拡幅した部分では、その北壁で土層の堆積状況を確認することができた。アスファルト舗装と路床の碎石(厚さ約25cm)、暗茶褐色土(厚さ約10cm)が観察され、西部では暗褐色土(厚さ10~20cm)が堆積していた。この土層からは埴輪片が出土している。埴輪片は、円筒埴輪を主とするが一部形象埴輪も含む。

暗褐色土の帰属する時期は出土遺物によっては判断できないが、一帯が耕作地として開発される時に上部が削平されたものと推測される。



第4図 23-1区平面図



第5図 23-1区断面図

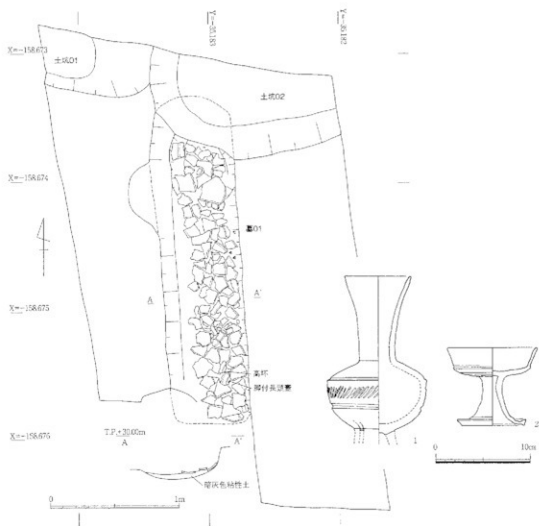
(2) 検出された遺構と遺物

調査区のほとんどの部分（とりわけ東部）は、地山面上に、直接、盛土もしくは攪乱層がのり、地下埋設物等により遺構面はすでに荒らされた部分が多かった。

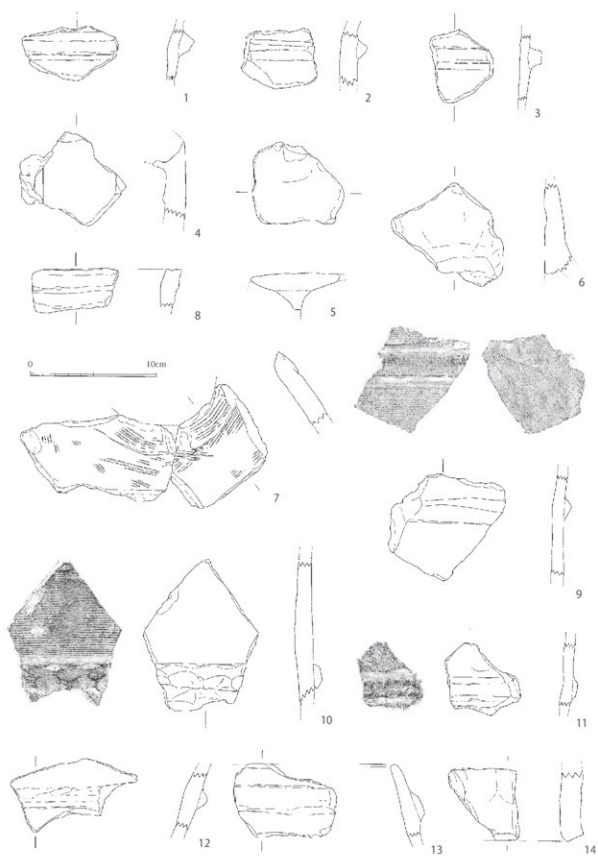
検出された遺構 調査区西部では、18-2区の西方3.5m付近から地山面がやや下降し、暗褐色土が堆積する。暗褐色土には限定された部分に埴輪片が比較的まとまって出土している。また、この付近では地山面上に直径約10cmを測る小形ピット2個を検出した。

18-2区との境付近には、浅い落ち込みが存在し、須恵器片がまとまって出土した（落ち込み1）。この須恵器片は、8世紀に比定される広口壺と小形の直口壺に還元された。

18-2区 墓01 当該地区は平成18年度に調査を実施した18-2区に接し、連続する遺構面が確認されている。18-2区では円筒埴輪片を土壌の底に敷き詰めた埋葬施設である墓01が検出されている。上半部は、本調査区と同様、上層に堆積していた土層の形成過程の攪拌によって失われていたが、下部は良好に遺存していた。土壌の全長は約2.50m、幅は0.7m以上を測る。段丘層を掘りくぼめて作った土壌の底部に粘質土を置き、その上に埴輪片を1～2重に重ね床を作っている。南の小口に埴輪片を立てていた。



第6図 18-1区墓01の遺構と遺物



第7图 23-1区出土遗物(埴輪片)实测图

遺構の南部に須恵器の脚付長頸壺と高環が副葬されていた。調査担当者はこれらの遺物の存在から南側に遺骸の頭部の位置を想定している。

須恵器は、中村弘氏陶器編年Ⅱ形式5段階、田辺昭三氏陶器編年TK209型式併行である。使用されていた円筒埴輪片は、直径35～40cm前後に復元され、突帯間の二次調整はBb種ヨコハケとナデ調整のものがあり、当該地の南方に所在する仲津山古墳の樹立されていたものに類似する。底部の破片は含まれておらず、地上に露出する部分を打ち欠き転用したものである。本遺構は副葬されていた須恵器の年代から6世紀末から7世紀初頭に比定される(註1)。

当該調査区において検出された落ち込み1は8世紀の遺構であり、墓01ともに、当該地区一帯には古市古墳群の造営が終了した後においても、なお墓域の様相を遺している。

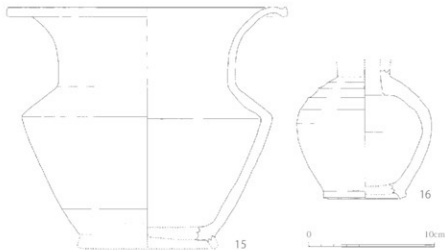
出土した埴輪 23-1区から、コンテナ1箱分の遺物が出土した。遺物の内容は、古墳時代の埴輪と奈良時代の須恵器である。

埴輪は、暗褐色土から出土した。すべて破片である。現位置を保ったものはなかった。

1～3は、円筒埴輪で、タガ部分の破片である。灰黄褐色～茶褐色を呈し、断面中央部は、黒色を呈している。表裏面とも風化し、調整は不明である。胎土は、砂粒・小石・金雲母・赤クサリ礫等を含み、脆弱である。野焼き焼成で、タガの断面が台形で高く突出していることから、円筒埴輪の形式的には古く、古墳時代前期のものと考えられた。

4～7は、古墳時代中期の形象埴輪である。灰黄色～橙色・茶褐色を呈している。胎土は精良で、登り窯焼成である。4は、表面に2本の沈線が平行に施され、裏面が直角に曲がるので、家形埴輪の可能性はある。5も、裏面に粘土を貼り付けていて、箱形を呈するが、器壁が薄い。6は、表面が反り上り、裏面に粘土を貼り付けているが、詳細は不明である。7は、上方部に径10cm程の楕円形の穴があき、端部外面に粘土帯の貼り付け突帯が付いている。外面には、刷毛目が荒く施されている。内面が下方に下がっていくので、衣笠形埴輪のようにも見えるが、詳細は不明である。

8～14は、古墳時代中期の円筒埴輪である。灰黄色～橙色・茶褐色を呈している。胎土は、



第8図 落ち込み出土遺物(須恵器)実測図

精良なものが多く、登り窯焼成である。8は、口縁部端で、外面に強いナデを施すことによって、突帯を貼り付けたように表現している。口縁端部上面には、凹線がある。9は、タガ部分の破片である。タガの断面は三角である。外面は、斜めハケの上に横ハケを施し、内面は斜めハケである。10は、大型円筒埴輪のタガ部分の破片である。外面は、灰色を呈し、須恵質で、焼成堅緻である。外面は、斜めハケの上に横ハケを施している。タガは、断面が扁平な台形で、下端部を連続的に指押さえている。11は、タガ部分の破片で、タガの断面は、扁平な台形で、外面に斜めハケの上に横ハケを施している。12は、タガ部分の破片で、風化のため、タガ断面も丸くなっている。タガを水平にすると、外面上方が開くので、朝顔形埴輪の可能性はある。13は、内傾する形象埴輪の口縁端部片で、外面に幅広い断面台形のタガを貼り付けている。14は、小型円筒埴輪の底部破片で、外面には縦方向のナデを施している。

出土した須恵器 須恵器は、落ち込み1から出土した。15は、奈良時代の広口壺である。残存率は、約60%で、内外面は灰白色を呈している。底部には、高台を貼り付けた痕跡があった。16は、奈良時代の短頸壺である。残存率は、約20%で、外面は灰色を呈している。

第2節 23-2区の調査（図版1・2・4）

主要地方道堺大和高田線の南側の交通安全施設（歩道）設置予定地に幅1m、長さ30mのトレンチを設置した。当該地の南側は近鉄南大阪線の線路敷となり大きく掘り下げられている。

雨水管や集水弁設置によって掘削される深度約1mまで掘削し遺構・遺物の有無の確認をおこなった。高塚山古墳にかかわる遺構・遺物は検出されなかった。

現地表下約0.7mまでは、かつてここに建てられていた店舗の盛土や建物基礎であった。その下層からは礫が混じる黄褐色土が検出された。汚れの少ない比較的きれいな土層であったが、高塚山古墳の墳丘の盛土ではなく道路建設時の盛土層であると考えられる。

高塚山古墳の墳丘の西端と周壕の確認するのが目的であった。掘削深度が浅く、所期の目標は達成できなかった。

第3節 23-3区の調査（図版1・2・4）

国府遺跡の範囲に含まれる一般国道旧170号の東側の歩道設置予定地に4カ所のトレンチを設置した。雨水管と集水弁の設置による掘削が遺構面等に達するか、否かの確認が目的である。いずれも一辺1mの規模のトレンチで舗装（アスファルト）と路床を除去した後、重機により掘削した。

23-3-1区 現地表面下1mまで掘削した。舗装（アスファルト）と路床を除去すると、調査区東側半分は地下埋設物の掘り方の埋戻土であった。西半分は礫が混じる黄褐色土が検出さ

れた。道路建設時の盛土層である。

23-3-2区 現地表面下1 mまで掘削した。舗装（アスファルト）と路床を除去すると、暗茶褐色土を基本とするブロック土が検出された。道路建設時の盛土層である。

23-3-3区 地表面下1 mまで掘削した。舗装（アスファルト）と路床を除去すると、暗灰色土を基本とするブロック土が検出された。道路建設時の盛土層である。

23-3-4区 現地表面下0.5 mまで掘削した。舗装（アスファルト）と路床を除去すると、地下埋設物に関わるコンクリート製の構造物があらわれ、その下層の確認は不可能であった。

小 結 いずれの調査区においても、雨水管と集水弁の建設による掘削によって、遺構面や遺物包含層に達しないことが確認された。

註 1) 本項は、『林遺跡・国府遺跡・土師の里遺跡—一般国道（旧）170号及び主要地方道堺大和高田線交差点改良工事に伴う発掘調査—』（大阪府埋蔵文化財調査報告2008-4）による。

第4章 まとめ

当該年度の調査は、交通安全施設（歩道）設置工事に伴う限定的な調査であった。高塚山古墳の西側の発掘調査（23－1区）を中心に実施した。墳丘裾部の外側に当たることから周溝の存在を予想したが、その有無を含めて確認することはできなかった。

調査区は、後世の開墾や道路建設に伴う工事、地下埋設物の設置によって土層の上部が攪乱されており、遺物包含層は地山面の直上にわずかに遺存するのみであった。ここから周辺の古墳で使用されていたと推定される埴輪片が出土した。円筒埴輪片は、古墳時代前期にさかのぼるものと、中期のものがあり、さらに中期ものには形象埴輪の破片も含まれていた。

また調査区の中央部付近では遺構面が確認できた。隣接する平成18年度に実施した18－2区では円筒埴輪片を敷き詰めた墓の最下部の部分が検出されている（墓01）。今回調査でも、その隣接地で、奈良時代の須恵器壺を納めた浅い落ち込みを確認している。遺物は細かい破片になっていたが、大部分の破片が接合することができた。ここに完形の遺物を納めた遺構が存在していたことが予想される。

高塚山古墳の周辺には、古墳造営後の埋葬施設や、さらにその後の種々の施設が長期間にわたって営まれたことをうかがうことができる。このことが今回の調査の最大の成果である。

断続的に6ヶ年度にわたって実施した当該事業に関わる一連の調査は、限定された規模の小さい調査区での成果をつなぎ合わせることで、明らかになったことも多い。そのひとつが唐櫃山古墳についてである。唐櫃山古墳の墳丘と周濠の一部を確認し、墳丘規模や周濠の様相を明らかにすることができた。唐櫃山古墳は戦後すぐに調査が実施された。古市古墳群でも主体部の様相が明らかにされた数少ない事例である。しかし当時の発掘調査では墳丘にまで詳細な調査をするには至っていなかった。時代の制約を受けていたのである。

今回の調査では、その成果を補足し、唐櫃山古墳の全体像把握にむかって一歩進んだことになった。

遺跡や古墳が密集して分布する当該地帯においては、小規模な調査においても重要な情報を得ることができる。このことを銘記しておきたい。

圖 版



調査区西部北側全景(西から)



調査区西部北側土層断面(南東から)



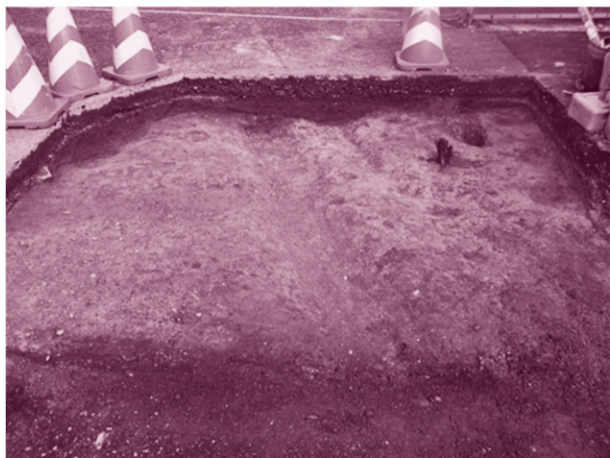
調査区東部南側全景(西から)



調査区東部南側土層断面(南西から)



調査区中央部南側全景(東から)



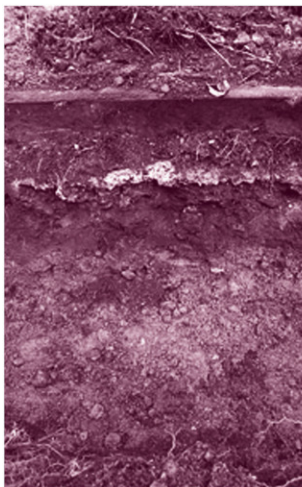
調査区西端部全景(南から)



23-2区東部全景(東から)



23-2区西部全景(東から)



23-2区土層断面



23-3-1区全景(北から)



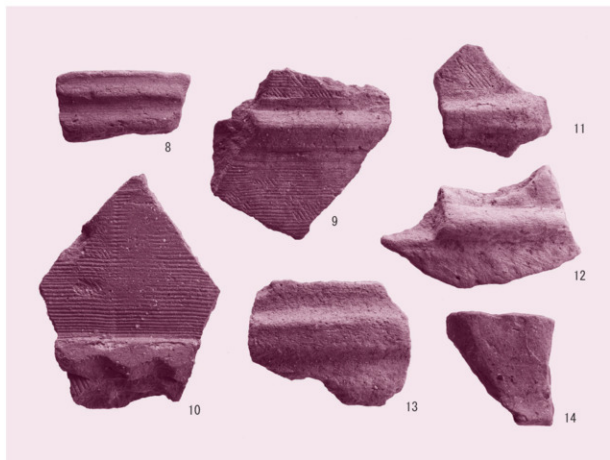
23-3-2区全景(北から)



円筒埴輪(古墳時代前期)



形象埴輪(古墳時代中期)



円筒埴輪(古墳時代中期)



須恵器 広口壺



須恵器 小型直口壺

報告書抄録

ふりがな	はやしいせき・こういせき
書名	林遺跡・国府遺跡
副書名	交通安全事業に伴う発掘調査
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	2012-4
編著者名	小林義孝
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL 06-6941-0351 (代)
発行年月日	2013年 3月 31日

所取遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はやしいせき・ 林遺跡・ こういせき 国府遺跡	おおさかふふいいでらし 大阪府藤井寺市 さわた 沢田3丁目・ こう 国府1丁目	27226	55・3	34° 34' 8"	135° 37' 2"	20111212～ 20120319	150	記録保存調査

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
林遺跡・国府遺跡	集落	古墳時代 ～ 奈良時代	ピット等	円筒・形象埴輪片 須恵器壺	
要約	交通安全事業に伴う発掘調査				

大阪府埋蔵文化財調査報告2012-4

林遺跡・国府遺跡

—交通安全事業に伴う発掘調査—

発 行 大阪府教育委員会
〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目
TEL 06 - 6941 - 0351 (代表)

発行日 平成25年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所
〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号